

オペラにおける 男女の愛の三つの形態

《ドン・ジョヴァンニ》と《タンホイザー》



驚愕のメール

NHKのオペラ講座で《タンホイザー》を観ています。いつも、講座の感想をお寄せいただく方が、二、三名、おいでです。貴重なご意見が多く、とても参考になります。先日もまた、特別に驚くべきご意見が寄せられました。メールの常連の女性の方からです。「タンホイザーはドン・ジョヴァンニです。先生の仰る三つの男女の愛は、ドン・ジョヴァンニを取り巻く三人の女性のそれです」。これには、気を失うほどのショックを受けました。私は、まったく気がつきませんでした。まさにその通りです。慧眼(けいがん)です。快樂主義者のドン・ジョヴァンニは、日々、女性を求めて彷徨い、愛欲地獄に落ちたも同然です。タンホイザーもまた、情欲を求める心情が強く、領主や騎士仲間から忌み嫌われ、領土から排斥されてヴィーナスの元に逃れ、日々、快樂の内に一緒に暮らしているのです。ドン・ジョヴァンニとタンホイザーのこの二人は、同じ人物です。この二つのオペラ作品は、同じテーマを扱っているのです。それは、男女の愛の三つの形態についてです。特に、セックスを伴う情欲についてです。このテーマは、どうしたことか、ワーグナーによって、彼の最後の作品《パルジファル》においても、執拗に追求されています。一方、モーツァルトが、《ドン・ジョヴァンニ》(1787初演)の後篇として書いたのが喜劇《コシ・ファン・トゥッテ》(1790初演)でした。モーツァルトは、結局、「男女の愛」など、どうでもいいものとして、最後には笑い飛ばしたのです。

愛の三つの形態

《タンホイザー》の講座で、私は、「このオペラの主題は男女の愛です。ワーグナーによれば、それは三種類あります。宗教的な聖母マリアさまや騎士道的な清らかな愛と、セックスだけを求める性欲の愛と、セックスが伴うとは言えお互いの絆を確かめるための親密な愛の三つだ」と説きました。《タンホイザー》では、清らかな愛は、聖母マリア信仰と貴族の奥方たちがその対象です。性欲の愛はヴィーナスです。絆を確かめる親密の愛は、情欲は達成されませんでした、エリーザベトです。モーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》では、宗教的で貴族たちの清らかな愛はドンナ・エルヴィラが、セックスだけを求める女は村娘ツェルリーナが、お互いの絆を確かめる愛はドンナ・アンナが、それぞれ受け持ちます。

最高の女性ドンナ・エルヴィラ

この二つの歌劇の中のあわせて6人の女性の中で、真実の「愛」を語るにもっとも素晴らしい女性はだれかと言えば、まず、ドンナ・エルヴィラが上げられます。ドンナ・エルヴィラは、ブルゴスの貴婦人でしたがドン・ジョヴァンニにだまされて結婚したのはいいのですが、三日後に、もうドン・ジョヴァンニは逃げていきました。捨てられたドンナ・エルヴィラは、「なんて、悪い男でしょう。きっと地獄へ落ちるわ。でも、この悪者を地獄から救ってやるのが私の使命なのかも知れない」と決心して、ドン・ジョヴァンニを神の前で改心させようと探し探してセヴィーリアまでやってきたのです。しかし、何度言ってもドン・ジョヴァンニは改心などせず、相変わらず女性をだまして、ついには、だましたドンナ・アンナの父親の騎士長まで殺すはめになりました。騎士長の呪いがドン・ジョヴァンニにおよんだので、ドンナ・エルヴィラは、必死になって、彼が地獄へ落ちるのを助けようと騎士長の先回りをして悔悛(かいしゅん)を迫るのです。でも、ドン・ジョヴァンニは言うことを聞かず、ついには騎士長に手を掴まれて地獄へ落ちるのです。「私は修道院に入って、そこで人生を終えましょう」とドンナ・エルヴィラはドン・ジョヴァンニの冥福を祈る決心をします。裏切られても相手を思う — これこそ、真の「愛」です。



エリーザベトの愛

ワーグナーの《タンホイザー》では、ドンナ・エルヴィラ役を、領主の姪のエリーザベトが務めます。エリーザベトは、罪の許しを得るためにローマに出かけたタンホイザーの帰郷を待っているのですが、彼は帰ってきません。それほど、彼の罪は深かったのです。エリーザベトは、自分もまた、不埒(ふらち)にも、それが妄想であっても、タンホイザーに情欲を求めた罪をマリアに祈り、許しを乞うのです。

エリーザベト（苦痛に満ちた、しかし落ち着いた様子で） あの方は戻らない。（きわめて厳粛な身振りで、ひざまずく） 全能の乙女マリアさま、私の願いを聞いてください。私を塵に返し、あなたのもとに行かせてください。ああ、もう地上には置いておかないでください。私を、清らかな天使のように、あなたの浄福の国に行かせてほしいのです。いちどは私も愚かな妄想にとりつかれ、あなたに背きました。罪への欲求と現世への欲望が、私の胸に芽生えたこともありました。私は、そんな気持ちを押し殺すため、数え切れぬ苦しみを受けたのです。それでも全ての過ちが消えないのなら、どうかお慈悲をもって、あなたのもとに受け入れてください。私は、マリアさまにお会いするにふさわしい乙女となって、マリアさまにこうお願いしたいのです — 「どうか、あの方の罪にも、あなたさまの慈悲と恩寵が授けられますように。」



タンホイザーの「ローマ語り」

タンホイザーは、人知れず、すでに故郷へ戻ってきていたのです。結局、ローマ法王からの許しは得られず、失望の内に、再び、ヴィーナスの元に戻ろうと帰ってきたのです。その哀れな姿がヴォルフラムに見つかり、ローマ行きの一部始終を話します。これが有名なタンホイザーの「ローマ語り」です。

タンホイザー 聞け、ヴォルフラムよ、聞け！ かつていかなる贖罪者も抱いたことのない熱情を胸に、私はローマを目指したのだ。あの天使(エリーザベトのこと)、ああ、あの天使が、私の高慢な心から罪深き思い上がりを取り去ってくれたのだ。あの天使のために、私は謙虚に罪を償おうとした。私には拒まれている救いを、ひたすらお願い、かつて私という罪びとのために流された天使の涙を、甘き思い出に変えようとしたのだ！

それゆえ、最も深い悩みを心に抱いた巡礼者の歩みさえ、私には楽なことと思えたのだ。その者が、野の柔らかな土を踏むならば、私は裸足で茨と岩を踏んだ。その者が泉で口を潤すならば、私は太陽の灼熱をすすった。その者が敬虔に天に祈りを捧げる時には、私は神を讃えて、我が血をしたたかせた。巡礼者たちが宿坊で疲れを癒す時には、私は雪と氷の中に身を置いた。絵のような風景を見ないために眼を閉じたまま、私は何も見えない状態でイタリアの沃野を通り過ぎていったのだ。私がそうしたのは、ひたすら悔い改めて、私の天使の流した涙を甘き思い出に変えたいとの一心からだっただのだ。

こうしてローマの聖地にたどりつき、私は聖堂の門前にひれ伏し、祈りを捧げた。その一日が始まった。鐘は鳴り響き、天から聖歌が響いてきた。恩寵と救いが群衆に約束され、激しい歓呼の音が沸き起こった。そのとき私は、あの男(ローマ法王のこと)を見た。彼は神のお告げを告げ知らせ、その前で民衆が埃にまみれてひざまずいていた。この男は、無数の群衆に恩寵を与え、罪を免れた喜びに立ち上がらせていたのだ。私もそこに近づいた。地に頭を擦りつけて、悲しく両手を振りながら、かつて私の五感を支配した邪悪な快楽といくら悔いても静まらない欲望とを懺悔し、荒々しい苦痛に身をよじりながら、この灼熱の縛めから救われるよう願ったのだ。

すると、私が救いを求めた男は、こう話し始めたのだ — 「邪悪な欲望にあずかりし者、地獄の業火に身を焦がせし者、ヴェーヌスベルクにいた者よ、いまこそお前には永遠の呪いがくだった！ 我が手の中にある杖に、二度と緑が芽吹くことがない如く、お前は地獄の灼熱から、決して救われることはないであろう」。

私はこの断罪に気が遠くなり、全ての意識が消え失せた。そして再び目覚めたときは、誰もいない広場を、夜のとばりが覆っていた。遠くから聞こえてくるのは嬉しげな讚美歌……。その聖歌に、私は吐き気を催したのだ。恩寵の空手形を切るウソ偽りの響きに、私は、氷のように冷たく心を切り刻まれ、嫌悪感のあまり、足取りも荒く立ち去ったのだ。

その時私にひらめいたのだ — あの歓喜の国に帰ろうと。あれほど多くのものを味わった、あの女神の胸へと！ ヴェーヌス、あなたのもとへと帰るのだ。あなたの魔力が司る優しき夜の世界へ。あなたの庭園に降りていくのだ。永遠にあなたの魅惑が微笑みかける、あの場所へ！

エリーザベトの死による救い

そのとき、亡くなったエリーザベトを葬るために、谷間の墓地へと向かう人たちがやって来ます。エリーザベトは、マリアによって、天国へ導かれたのです。棺を担いだ貴族たちを先頭に、領主のヘルマン方伯と歌びとたちは棺の脇に従い、伯爵たちや貴族たちがその後ろについています。

男たちの合唱 この姫は天使にふさわしい報いを受けた。天国の喜びを手に入れられたのだ。聖なるかな、清らかな姫。いまや聖霊とご一緒に、永遠の神の御前に立っている。罪びとに幸あれ！ 姫はお前のために涙を流し、天国での救いを祈られたのだ。

エリーザベトの棺を前にして、タンホイザーはくずおれます。

タンホイザー 聖なるエリーザベトよ、私のために祈ってください。

そして、タンホイザーは、なぜか、息絶えます。

そのとき、巡礼者たちが奇跡を伝えます。涸れた杖から、新芽が芽吹いたのです。タンホイザーの魂は、エリーザベトの死によって赦され、救われたのです。



巡礼者の合唱 聖なるかな、聖なるかな、恩寵の救いの奇蹟だ。この世に救済がもたらされたのだ！ 夜の聖なる時間のうちに、主なる神は奇蹟を起こされたのだ。司祭が手にした枯れた杖を新緑に芽吹かせられたのだ。罪びとが地獄の炎のうちにあろうとも、必ずや新たに救済はもたらされる！ 恩寵の奇蹟を見出だした罪びとに、国の四方から歓呼の声が響いてくる。天の高みに神はおられる。神のお憐れみを嘲るなかれ。ハレルヤ！ ハレルヤ！ ハレルヤ！ この贖罪者にも恩寵の救いが与えられた。至福と平和の眠りにつくのだ。

さて、ドンナ・エルヴィラとエリーザベトと、どちらが、「真の女性」でしょうか？ メールの主に訊いてみたいものです。

タンホイザーの魂は、なぜ、宗教によって救われなければならなかったのか

ワーグナーは、タンホイザーも死なせて天国へ送ってから、神さまと法王とエリーザベトの恩情を強調して、ハッピー・エンディングでオペラを終えました。でも、タンホイザーはそれで良かったのでしょうか？ 天国よりも、ヴィーナスと一緒に、快樂の洞窟の中で暮らしたかったのではなかったのでしょうか？ タンホイザーとの情欲を願っていたエリーザベトも、実は、それを望んでいたのではなかったのでしょうか？ ワーグナーの真意を疑います。ワーグナーの作品はすべて、世界を変えたいとおもって書かれました。ダーウインやマルクスと同じように、新しい時代の新しい価値感で、人を変え、社会を変えようと思ったのです。でも、《神々の黄昏》(1876) のヴォータンのように、中世的な極権(しっ

く:手かせ足かせ) をはめられたタンホイザーもまた、不首尾に終わりました。社会変革で成功したのは、ニュルンベルクのマイスタージンガーたちとその都市市民だけです。

《タンホイザー》は4連敗

いま、NHKの講座では、オッフエンバックのオペレッタを観ています。彼の代表作《パリの生活》(1866) と《ジェロルスタン大公妃殿下》(1867) の二つです。この二つのオペレッタは、パリ万博で浮かれ踊る観光客を利用(騙す)して、自由恋愛を謳歌するパリジャンたちが主人公であり、ドイツ統一をめざすプロイセンとこれを阻止しようとするフランスとの間で行われた無駄な「普仏戦争」(1870-1871) に対する、この時期のフランス第二帝政下での厭戦的(えんせんてき)な国民が主人公です。ワーグナーの《マイスタージンガー》とオッフエンバックの《大公妃殿下》は同じ 1867 年に初演されました。同じ年に初演されたワーグナーの楽劇を「雅」とするならば、オッフエンバックのオペレッタは「俗」です。

「雅」と「俗」の争い

ここでいう「雅」とは、その時代を支配していた領主たちの封建社会や教会の宗教社会の古い保守的な考え方であって、一方、「俗」とは、「雅」では理解出来ない、「雅」が取り残した真実のことを言うのです。オッフエンバックの風刺オペレッタは、直接、国民や社会風俗を主人公としていて、そこには、国内外の貴族たちも登場しますが、中心をなすのは、高級娼婦を食い物にするジゴロであり、お屋敷の侍従や侍女であり、外国からの労働者たちや靴屋や手袋屋たちです。歌われ話されている台詞(せりふ)も、自分たち庶民が使う言葉である俗語であり流行語です。これこそ、「雅」を離れた「俗」の世界の物語です。当然、オペレッタの舞台上では、社会変革への意欲とエネルギーが旺盛であり、ドラマの展開の手法も直截的で明快です。ワーグナーも、《タンホイザー》で、当然、「雅」の世界を否定した「俗」の世界の愛の真実、すなわち、情欲を語ろうとしたのですが、どうしたことか、歌合戦で、タンホイザーを守ろうとする当のエリーザベトに勇気がなく、肝心の土壇場で、タンホイザーの情欲説に身方するのではなく、「雅」を、すなわち、既存の聖愛を支持する意見を述べたことです。これは、エリーザベトの裏切りではなく、作者のワーグナーの神を畏れた振る舞いのおかげです。なんのために、タンホイザーに情欲を主張させたのでしょうか。敵陣を前にして、勇者の臆病振りを露呈したにすぎません。

結局、ワーグナー(1813-1883) の《タンホイザー》は、モーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》と《コシ・ファン・トゥッテ》には破れ、オッフエンバック(1819-1880) の二つのオペレッタにも負けた失敗作だというのが私の評価です。ワーグナー自身も、書き直しを望んでいたはずです。

自前の劇場

ワーグナーとオッフエンバックの最大の共通点は、両者とも、自分の音楽作品を上演するための個人独自の劇場を持っていたことです。これは、二人の作品を評価する上でも重要なことです。ヴェルディは、「私の最高の作品は、音楽家たちのための憩いの家だ」といいました。これは作曲家にしては最低の冗談です。ワーグナーは、自分の複雑なポリフォニーの音楽の響きを観客が正確に聞きとれるようにバイロイト祝祭劇場を建て、オッフエンバックは、座付きの歌手や俳優や踊り子や遊芸人たちとの親密なる共同作業を可能にして、国内外のお客を満足させるために、パリでブフ・パリジャン座の経営にとり組みました。自前の劇場あつての舞台芸術作家です。

【2024/05/30 都築正道】